

第9回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム報告

実行委員会委員長 名古屋大学 工学部

正 嶋 宏 祐

去る平成8年1月8日から1月11日までの4日間、合同シンポジウムが、愛知県岡崎市竜美ヶ丘会館及び岡崎国立共同研究機構分子科学研究所において、日本放射光学会の主催、高エ研フォトンファクトリー（PF）、東大物性研軌道放射物性研究施設（INS-SOR）、分子研（UVSOR）、原研・理研大型放射光施設計画推進共同チーム（SPring-8）及びこれらの利用者懇談会の共催で盛会裏に開催された。

放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウムとなって第2回目であり、分子研のUVSOR施設及びその利用者が中心となって世話をした。この2回の経験を踏まえて、改めてその後の開催方式を見直すことにしている。1月8日には、分子研においてUVSOR利用者懇談会とINS-SOR同好会が開催され、施設の職員と利用者との懇談及び成果発表が行われた。さらに、学会の各種の委員会が開催された。9日と10日には、学会の年会の講演と発表が行われた。10日午後から11日にかけて、PFシンポジウム及びSPring-8の利用者懇談会等が開催された。

特別講演1月9日には、次の3名の講演者による特別講演があった。NSLSのS. Krinsky博士が私用で来日出来なくなり、急遽木原元央PF施設長に講演をお願いしたところ、「光の夢」という題でシンクロトン放射におけるコヒーレンス光の生成を中心について興味ある講演をしていただいた。次に、現在台湾の中央科学院院長である李遠哲(Yuan T. Lee)博士(1986年ノーベル化学賞受賞)は、カルフォルニア大学バークレー校のALS(Advanced Light Source)のアンジュレータービームラインを用いた全く新しいSRの利用法、すなわち分子の光解離生成物のアンジュレーター光イオン化による検出法の開発とその結果について講演した。また、阪大蛋白研究所の月原富武教授が、最近注目を浴びているX線回折法によるチトクロームC酸化酵素酵素の構造解析結果を報告された。企画講演①真空紫外光化学反応過程(4件)、②超高分解能X線分光(2件)、③固体表面・界面(3件)、④コヒーレントX線(2件)の四つの企画で、計11件の企画講演がなされた。①は、化合物の一重結合エネルギーよりも大きい200nm以下の波長の真空紫外光を分子が吸収したとき複雑な反応が起こり全く予想できない場が多い。これに手がかりを得ようとするための企画講演である。次に、最近のめざましい技術的な進歩によって、高輝度で高波長分解能のX線が登場し、“見える”物質の世界が広がった。②、③、④の企画では、このあたりの進歩と将来の展望について発表していただいた。

[口頭発表] 多くの聴衆を収容する会場が少ないこと、1会場への聴衆を多くしたいという目的で、今年は発表会場を二会場に限り、全部で23件の口頭発表があった。両会場ともに多くの聴衆を集めていた。

[ポスター発表] 地方で行われた学会としては多い192件のポスター発表があった。既に述べたように企画講演や口頭発表の件数が限られてたので、ほとんどの発表はポスター発表に回っていただいたことになる。

[施設報告] 今回は、既設の施設報告、建設・計画中の施設の紹介・報告は合計11件にも達し、口頭ではなくてポスター発表でなされた。PF、SOR-RING、UVSOR、電総研、自由電子レーザー研究所等の現存施設の他に、SPring-8、立命館大学SR準備室、名古屋大学、広島大学放射光科学研究センター設立準備室、兵庫県、東北大学等による放射光施設建設進捗・計画が紹介された。詳しい情報が交換できるという意味では、口頭発表よりもよいという意見も聞かれた。

[企業展示] 不況にもかかわらず、今年は昨年を上回る29の企業が企業展示をした。この分野の発展状況を象徴していると考えている。

[シンポジウム] 各施設の利用者懇談会またはシンポジウムが、約丸1日半をかけて行われた。それぞれの施設の従来のやり方を引きずっているという印象もあるが、施設なりに使った時間程度は必要であるように見えた。しかし、プログラムを編成した一員としての印象を述べさせていただくと、丸2日間はサイエンティフィックプログラムのために割けたならば、放射光科学の活動を肌で体験できる場である合同シンポジウムを、より魅力あるものにできたのではないかと感じている。

[全体的な印象] 1月10日朝には雪が降ったが、シンポジウムの進行には大きな混乱がなかったことは幸いであった。さて、ポスター会場と講演会場が同じホールで開催されたために例年長くなるポスター発表の実質的な時間が短くなった。ほとんどの発表はポスターにまわって頂かざるを得なかったので、その内には重要な発表が多くあった。SPring-8の建設、設計が進み、KEKのMRのホットなデータが発表され、新しい施設の建設発表・計画の提案が目白押しでどの会場でも熱気に溢れていた。2回の合同シンポジウムの結果を踏まえて、来年度も合同シンポジウムをして開催されるであろうが、さらに盛り上がったものになることが予想される。

最後に、地方で開催されたシンポジウムとしては多い、400の参加登録があった。なお、シンポジウムのみ参加者もあったようであるので、実際にはより多くの参加者があったとみている。その意味では、今回の合同シンポジウムは成功であったと感じている。その成功は、実行委員会副委員長である木下豊彦UVSOR助教授をはじめとする委員の方々、招待講演者や、口頭及びポスター発表者、さらには座長の先生方、一般の参加者の全ての方々の御努力の賜であると心より感謝している。